ケロニアの密室

Kan

この世の中にはちょっと信じられないような、奇妙な事件があるものです。わたしが、ウルトラマンのケロニアの回（『来たのは誰だ』）を好んで観ていたのは小学生の頃くらいまでで、それから二十年という月日が経っているのですが、このケロニアという化け物の恐ろしき映像の記憶は、今でもこの瞼に鮮明に焼きついております。ケロニアとは、吸血植物の怪人であり、科特隊の南アメリカ支部に特派員として加わっていた後藤隊員になりすまし、日本の科特隊の基地に潜入して、周到な企みのもと、人類を脅かしたという恐ろしいやつでありました。この怪物は、なんでも南米の吸血植物であり、目からは怪光線を放つという特技を持っているようでした。

わたしは三十歳という若さではありましたが、今では南米で失踪した父の代わりに、ウルトラマンの巨大怪獣模型で埋め尽くされたコンセプト旅館『科特隊』の主人となっていました。わたしはちょうど本名が村松という姓であったので、科特隊のオレンジ色のコスチュームを着て、旅館の主人を勤めていたのです。

十月三十日の夕方です。そのコンセプト旅館『科特隊』に後藤と名乗る怪しい男がやってきたのでした。後藤は覆面を被り、南米ボリビアからやってきた為に、日本語が片言だというのでした。

「そうですか。それでは、こちらの部屋などはいかがでしょう」

「村松さん。それよりも、わたしはこの部屋の壁の素材を知りたい……」

「えっ、普通の木造建築ですが……」

「そうですか。それなら結構です。それとわたしの前で煙草は吸わないように……」

「何故です。煙草はお嫌いですか」

「いえ……この男を見て、背筋に氷水をにゾッとしないわけにはいきませんでした。まるで語ることがケロニアの変身した後藤隊員の台詞のような調子なのです。

わたしは若い女性の悲鳴を聞きつけ、後藤氏の部屋へと駆けつけました。ところがドアには鍵がかかっている。肩をぶつけるようにして、ドアを粉砕しながら、無理矢理開けると、中にはケロニアのフランス人らしい女性の遺体と思しき人影が倒れていました。そして机の上には首を絞められたと思しき、若い金髪の女性の遺体が置かれていたのです。

「密室殺人だ。まさか、あの……？」

わたしはハッとして、壁側にある衣装棚を見つめました。

密室である以上、この中には犯人は隠れているとしか思えないのです。

衣装棚を開けると、そこにはケロニアの着ぐるみを着た男が立っていました。

「お前はケロニアが好きだったもんな」

ケロニアの被り物を外すと、そこにあったのは微笑んでいる父親の顔でした。

「カメラ付きのラジコンを遠隔操作していたら、泥棒が侵入してきたから計画がバレると思って、慌てて首を絞めたんだよ。なあ、息子よ……また父さんと一緒にウルトラマンでも見ないか？」

時刻は十二時を回っていました。そうだ。今日はハロウィンだったんだな、なるほど仮装したケロニアが現れてもおかしくない夜なのだ。……わたしは自分でも知らぬ間に、父との二十年ぶりの再会に涙していたのでした……。

〈了〉

新生ミステリ研究会をよろしくお願いいたします。